

## 『湿式工法』と『乾式工法』

建築で使う、『湿式』・『乾式』の二つの工法についてお話します。

新築やリフォームの打合せでよく使われる言葉ですが、字面から何となく意味が想像できますね。

**湿式工法**(しっしきこうほう) は、現場で水を混ぜながらつくった、モルタルや土壁などの材料を使う方法です。施工は天候に左右され、乾燥の為の養生期間が必要なので工期は長くなります。壁仕上げの例ですと、漆喰、リシン、モルタル壁などの左官仕上げがあります。現場作業なので手間はかかりますが、材料の種類や調合方法で様々な質感や雰囲気を楽しめます。

**乾式工法**(かんしきこうほう) は、工場で生産されたパネルや合板などを現場で取り付ける工法です。養生期間の必要が無いので、天候に左右されることなく工期を短縮できます。外壁仕上げでは、工場生産のパネルを現場で取り付けるサイディングが代表例です。

住宅に限らず、建築界全体が湿式工法から徐々に乾式工法にシフトする傾向にありますが、最も大きな理由の一つは工期の短縮です。

工期短縮は発注者、供給者双方に大きなメリットがあり、現場作業を減らし、工場生産品を多用する事で品質管理がし易くなります。

湿式工法は職人の技量の差が、そのまま出来具合に反映するので、腕の良い職人の確保が大切ですが、乾式工法はマニュアルどおりに施工すれば、一定の品質確保ができるので、職人の技量の差は湿式工法ほど問題になりません。

従来は湿式で施工していたタイル貼りや石貼りも、最近では乾式工法で施工されるケースも増えてきました。

モルタルでタイルを貼る代わりに、壁に専用のベースサイディングを取付け、タイルを引っ掛けて固定します。石材は今までの、躯体に引き金物で緊結し石裏にモルタルを充填する代りに、ファスナー(取付金具)で石材を躯体に取付け、モルタル無しで施工します。

いずれもモルタルを使わない分工期は短くなり、専用サイディングやファスナーの工夫・開発により、熟練工以外でも施工できるようになります。

20～30年前に比べると、左官職人の数は大きく減少しています。

浴室を例に挙げると、従来の現場施工は湿式工法に分類され、ユニットバスは乾式工法に分類されます。

現場施工の浴室よりユニットバスを選ぶ方が増えたことや、台所の流し台廻りの壁も、タイル張からキッチンパネルに変化していく中で、タイル職人も左官職人同様減少しています。

以前は防火構造の木造住宅と言えば、外壁はラスモルタルで洋風ならば吹付塗装、和風ならばリシン掻き落しが多く見られました。

最近では、管理のし易さや工期短縮の観点から、防火サイディングが増えているようです。

ラスモルタル壁はクラック(ひび割れ)の恐れや、メンテナンスの手間が掛かると言われていますが、適切な素材で丁寧に施工(ラス金網の選定、モルタルの調合、施工時期、職人の技量)されれば、あまり心配することはありません。

生産効率の点から見ると、モルタル仕上げよりサイディングにメリットがありますが、サイディングの質感を嫌って、珪藻土や火山灰のシラスを使い、左官仕上げにこだわる例もあります。塗壁なので、複雑な形状や曲線にも対応できます。

サイディングの材質は、窯業系、金属系、プラスチック系などがあり、製品のグレードも高級品から普及品まで、予算に合わせて選定できます。

品質の安定性やコスト、メンテナンスの手軽さを最優先する場合は、工場生産品を使う『乾式工法』のほうにメリットがありそうです。

まだまだ、比較論はいろいろありますが、設計者・施工者とよく相談して、各々の特長を考えながら最適な仕上げ方法を選定して下さい。